



## 「第二次日本経穴委員会」便り

～第39回 経穴国際標準部位公表直前～

第二次日本経穴委員会・作業部会委員 かとりとしみつ  
香取俊光

今回は、皆様から寄せられた声と関東鍼灸専門学校からまとまった質問がありましたので、それらを要約して紹介します。

### 中間報告への質疑と回答

**Q1**

新経穴部位の出版・公表はまだですか？

**A1** 2008年以内には公表できると思います。

経穴の各部位に添えるイラストの作成に手間取りました。日本で作成しましたが、その作成の苦闘は言葉に尽くせません。

イラストは、中国・韓国に確認後にWHO/WPROに承認が必要です。しかし、この後のWHO/WPROでの出版は、国内の出版よりも時間が大幅にかかるそうです。現在は中国・韓国との確認の段階です。また、WHO/WPROの英語版出版ができない限り、国内の出版・公表ができないのも国際的な仕事の制限です。

皆様から「早い公表」を乞われる度に委員各位も歯がゆい思いをしています。

**Q2**

御茶ノ水大学での中間報告の資料の中で、解剖学用語に矛盾が見られますが？  
例えば、上肢、下肢の経穴で、「近位、遠位」と「上方、下方」などとあります。

**A2**

ご指摘の通りです。前腕、上腕および大腿、下腿部では上下が望ましく、手部、足部では、上下よりも近位、遠位のほうが肢位による混乱はないのではないのでしょうか。これらを含めて、2008年の国内公表に向けて修正していきたいと考えております。

**Q3**

経穴の部位の区分はどうなっていますか？

**A3**

体表解剖学に従って区分しました。これはガイドラインに示す予定です。

#### Q4

「手関節横紋」「肘関節横紋」など、関節の横紋部を基準としているが、多くの人に2～数本と認められるため、基準としてはあいまい過ぎます。使用しないほうがよいのではないですか。

**A4** 手関節横紋は遠位横紋を指すとガイドラインに定義してあります。単に手関節部、肘関節部では特定するのに、さらに細かな説明が必要となります。

#### Q5

督脈の棘間にある経穴・膀胱経の背部にある経穴の表記などが、これまでとは違いますが？

**A5** 督脈においては、棘突起下縁ではなく、実質的な陥凹部を記述しています。しかし、膀胱経の経穴に関しては、棘突起下縁から外方で取穴する方法を採用しています。そして、督脈と膀胱経は原則として横に並ぶと、膀胱経2行線の経穴の注に示してあります。

日本では、学校協会は棘突起間、理教連は棘突起下です。韓国、中国も大多数の古典文献と同様に理教連と同じでしたので、その説が採用されました。

#### Q6

橈骨茎状突起とはどこを指すのですか？

**A6** 橈骨茎状突起頂点を意味しています。今回の約束事として、体表から触知しやすい

解剖学的部位というのが前提となっています。解剖上の橈骨茎状突起は橈骨先端を指しますが、鍼灸学では古典から現代に至るまで、「掌後高骨(脈診上の関上の部の骨の飛び出したところ)」を橈骨茎状突起と呼び習わしており、この名称は、変更するか凡例で説明するかなど、今後WHOでも再検討の必要があると考えています。

#### Q7

「頭維と曲鬢を結ぶ曲線上…」などとあるが、どのような曲線ですか？

**A7** 「側頭前髪際を通る弧状の曲線上…」など、より具体的に表現すべきだと考えています。

#### Q8

教科書はどうなっていますか？

**A8** 2009年4月の国内統一教科書出版を目標に、理教連・学校協会が合意して編集が動き出しました。

今回の教科書改訂に際し、主な議論は、①経穴の国際化をどう反映するか②教科書としての体裁と教えやすさの問題(督脈・任脈と正経十二脈との配列、経穴をどう発音するか、どの漢字を使用するか等)をどう両立させるかでした。

新しく統一された教科書の予定通りの出版を心より願い、筆を置きます。

(〒371-10805 群馬県前橋市南町4-5-1  
群馬県立盲学校)